

今は とても便利な世の中になりましたので、例えば毎日の生活の中で寒い季節でも 火に触れることが少なくなりました、私が子どもだった頃は、お風呂は薪で焚いていましたし、火鉢で湯を温めたりおもちを焼いていました、学校の暖房も だるまストーブで教室の真中で 石炭をくべられたストーブが赤々と燃え 毎日がキャンプさながら、舌が応でも 地水火風といつても やりとりにしないと成り立たない生活でした。

お風呂を焚くのも、ストーブの後仕末も、七輪で朝餉の干物の魚を焼くのも・・・手間が かなり 重かったのが、今思うと、そのひとつひとつの時間そのものに 心も身体も向けざるを得ないので、ゆっくり ゆったり時間が流れ、自然と共に生きられる、結果として ゆたかな時間だったのかもしれない。

日々あまり意識をしないとしても、今でも私たちは 地水火風の四大の働きによって 生かされていて、だから 幼い子どもたちは、それらの素材をダイレクトに感じる 土や石や砂、水やどろや、光や色や焚き火、風やいい匂い・・・が大好きで、最高の遊び相手なのでしょう。

そんな四大の中で「火」は 特別なもので、ギリシアのプロメテウスがゼウスに内緒で「神の国」より人間にもたらしてくれた逸話は有名ですが、人が人として目覚め、また同時に自分たちが神々と共にあることを感じやすいので、聖なる儀式の拵に 火を点すのかもしれない。

12月にできなかった 焼きいもを、この1月に行きます、目当ては おいしいおやつ 焼けたお芋ですが、焼きあがるまでの「火」を子どもたちは 存分に楽しみます。

厄神さま(閻魔さま)の命で、村の子どもたち一人ひとりの番事を調べに来た ひとつ目小僧から、子どもを守るべく 塞の神(道祖神、狭田彦)がその書き付けた帳面を取り上げ 燃やしてしまったことから始まるとも言われている「どんど焼き」の意味をもこめて、私たちの 焼きいも体験を たいのめたらと思います。

ひとつ目小僧のように マイナスに見える面、子どもの課題・・・といった一面ばかりに目を向ける心を火にくべ、ひとりひとりの生きいきさ、そのものを見ることのできる 私たちの一年であることを願いながら・・・今年もよろしく お願いします。

園長 升光 泰雄